

「考えて動く」が「できる喜び」につながる指導の工夫

— ベースボール型における「考えて打つ」ことに着目して —

体育・保健体育科研究会議

佐藤 映子¹

中本 淳子²

関原 卓也³

佐藤 拓也⁴

要 約

学校を卒業した後も末永く生涯にわたって運動に親しむ子を育成することが、学校体育に課せられた役割である。そのためには、子どもたちが技能を習得する過程で、運動の楽しさやできる喜びを味わえるような体育学習が求められる。本研究会議では、子どもたちがそれぞれの運動の動き方や動きのポイントを理解し、自分の課題は何かを考え、意識して動くことが大切であると考え、その姿を「考えて動く」と定義し研究を進めた。

研究領域をベースボール型に絞り、ボールを「考えて打つ」子どもの姿を目指して、教師の意図的な手立てを探っていった。具体的には、①教師が伝えることの整理、②試合中心の道すじの工夫、③ティーボール（ソフトボール）体操の開発、④映像機器の活用、⑤学習カードの工夫と教師の支援、の五つである。検証授業を通して、五つの手立てが発達の段階に応じてそれぞれ有効であることが分かった。また、子どもたちは「考えて打つ」ことで技能を習得し、それが運動の楽しさやできる喜びにつながることを映像分析やアンケート調査により実証できた。

他の運動領域においても、子どもたちが動き方や動きのポイントを理解すると、それを活用して自分の課題を決め「考えて動く」ことができると考える。その学習過程において、教師は意図的な手立てを講じ、子どもたち一人一人に合った支援をしていくことが大切だと分かった。

キーワード：運動の楽しさ、できる喜び、考えて動く、教師の意図的な手立て

目 次

I 主題設定の理由	39	5 検証授業	44
II 研究の内容	41	(1) 検証授業の対象と教材	44
1 研究の方向性	41	(2) 教師の意図的な五つの手立て	45
2 研究の領域	42	6 検証授業後の考察	52
(1) ベースボール型の特性	42	III 研究のまとめ	54
(2) 「考えて打つ」ことに 着目した理由	42	1 研究の成果と課題	54
(3) 「考えて打つ」姿の定義	43	2 今後の展望	56
3 研究の仮説	43	参考文献	57
4 研究の方法	43	指導助言者	57

¹川崎市立大島小学校教諭（長期研究員）

²川崎市立西梶ヶ谷小学校教諭（研究員）

³川崎市立宮崎中学校教諭（研究員）

⁴川崎市立有馬中学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 はじめに

「今日の体育楽しかった！ またやりたい！」

そんな子どもたちの思いがあふれる授業がしたい。そう願って日々の体育学習に取り組んできた。子どもたちにとって、「今日の体育が楽しかった。」と思う瞬間はいつだろうか。できなかったことができるようになったときだろうか。友達とよい関わりができたときだろうか。逆に、運動することが苦手な子は、毎時間どのような思いをもって体育の授業に取り組んでいるのだろうか。

現行の学習指導要領では、表1にもあるようにそれぞれの運動で、「技能を身に付ける。」といった文言に加え、下線のように具体的な動きも例示として記され、指導内容が明確化された。

指導内容の明確化により、私たち教員は、子どもたちに何を身に付けさせればよいのかわかりやすくなり、技能の習得を意識した体育学習を行うことが増えてきた。

しかし、自分自身のこれまでを振り返ると、技能の習得に重点をおいた教師主導型の授業や、子どもたちが目的意識をもっていない反復的な練習を行う授業になってしまうことがあった。その授業を受けた子どもたちは「今日の体育楽しかった！」と書いていただろうか。

白旗¹の著書に、以下のような記述がある。

表1 小学校5. 6年 学習指導要領より抜粋

学習指導要領 (小学校5. 6年 陸上運動より抜粋)
(1) 次の運動の楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付けることができるようにする。 ア 短距離走・リレーでは、 <u>一定の距離を全力で走ること。</u> イ ハードル走では <u>ハードルをリズムカルに走り越えること。</u>

「できる」ということだけを目的にしてしまうと自分がやりたい気持ちより、やらなくてはならないという義務感が先に立つようになり、結局は嫌いになってしまうということが起こりがちですし、義務ではなくなった時には、運動から離れてしまうかもしれません。

「できるようになったけれども、もう二度とやりたくない。」これでは、学習指導要領に示された体育科の目的である「生涯にわたっての豊かなスポーツライフ」は実現できないでしょう。

学習指導要領の全面実施から小学校は5年、中学校は4年が経ち、もう一度その趣旨をきちんと理解することが大切である。そして今、目の前にいる子どもたちがそれぞれの運動の技能を習得することに加え、「生涯にわたって運動に親しむ子の育成」に結びつくような体育学習について探っていくことが必要であると考えた。

2 「楽しさ」や「喜び」の捉え

小・中学校の学習指導要領では、各学年の目標が表2のように示されている。どの学年でも「身に付ける」という文言の前に楽しさや喜びといった言葉が入っている。このことから、技能が身に付いていく学習過程で、子どもたちが楽しさや喜びを味わえるような体育学習を行っていくことが大切だと考えた。

白旗の著書²では、「楽しさや喜びの捉えも発達段階によって違いがある。」と述べられている。

小学校1年から小学校4年までは、いろいろな運動を経験し、動くこと自体を楽しんでいる時期である。すなわち、運動する中で自然とやさしい動きを身に付け、運動することの楽しさや体を動かす心地よさを十分味わうことができるような授業づくりをしていく必要がある。

そして、小学校5年から中学校3年になると、動くこと自体を楽しむだけではなく、自分の意図したことがうまくできたときに喜びを感じる段階となる。すなわち、自分の課題に向かって取り組み、できたときの達成感や満足感を得られるような授業づくりをしていく必要がある。

¹ 白旗和也 『学校にはなぜ体育の授業があるのか』 文溪堂 2013年 p. 45

² 白旗和也 『学校にはなぜ体育の授業があるのか』 文溪堂 2013年 pp. 46 - 47

表2 学習指導要領各学年の目標と「楽しさ」「喜び」の捉え

	学習指導要領 各学年の目標	「楽しさ」や「喜び」の捉え
一・二年 小学校	・簡単なきまりや活動を工夫して <u>各種の運動を楽しくできるようにする</u> とともに、その基本的な動きを身に付け、体力を養う。	「楽しくできる」 その運動を行うこと自体が楽しい時期である。
三・四年 小学校	・活動を工夫して <u>各種の運動を楽しくできるようにする</u> とともに、その基本的な動きや技能を身に付け、体力を養う。	そのような状況をつくり、運動を行うことで自然とやさしい動きを習得できるようにする。
五・六年 小学校	・活動を工夫して、 <u>各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする</u> とともに、その特性に応じた基本的な技能を身に付け、体力を高める。	「運動の楽しさや喜びを味わう」 ただ楽しいだけでは面白くなく、自分の意図したことがうまくいったとき、高まりを感じられたときに喜びを感じる段階になる。
一・二年 中学校	・運動の合理的な実践を通して、 <u>運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする</u> とともに、知識や技能を身に付け、運動を豊かに実践することができるようにする。	何かができるようになった、もしくは高まった時の満足感・成就感・達成感を味わうことができるようにする。
三年 中学校	・運動の合理的な実践を通して、 <u>運動の楽しさや喜びを味わう</u> とともに、知識や技能を高め、生涯にわたって運動を豊かに実践することができるようにする。	

3 主題設定について

学習指導要領の趣旨を踏まえ、これからの体育学習でどのような授業づくりをしていくことが大切なのか考え、次のように研究主題を設定した。

「考えて動く」が「できる喜び」につながる指導の工夫

— ベースボール型における「考えて打つ」ことに着目して —

本研究では、「考えて動く」を「子どもたちがそれぞれの運動の動き方や動きのポイントを理解し、自分の課題は何かを考え、意識して動くこと」と定義している。

今まで、授業の始めに小学校では今日のめあて、中学校では今日の課題として、できるようになりたいことやできるようにするための動きのポイントを学習カードに書く活動を行ってきた。しかし、その課題を意識して動くことができていなかったり、技能の習得につながる課題を見つけることができなかったりする子どもたちがいた。体育の授業において、めあてや課題を書かせることが当たり前になり、子どもたちに目的意識のないまま、課題設定をさせてしまっていたように思う。

このことから、前述で定義した「考えて動く」子どもたちの姿を目指す体育学習を行う必要がある。そして子どもたちは、「考えて動く」ことで技能を習得したときに「できる喜び」を味わえるのではないかと考えた。

本研究では、研究領域をベースボール型に絞った。ベースボール型とは、小学校3年から中学校3年までのゲーム・ボール運動（小学校）、球技（中学校）で記された学習内容の一つで、例示としてティールールやソフトボールが挙げられている。現行の学習指導要領から中学校でも必修となり、小学校・中学校共に研究が進み始めた領域である。

ベースボール型の動きの中でも、本研究では「打つこと」に着目した。打つ場面は、一人一人が活躍できる絶好の機会である。そのため、子どもたちは「こう打ちたいから、〇〇を意識して打つ。」や「ここに打ちたいから、〇〇に気を付けて打つ。」というような具体的な課題をもつことができる。その課題を意識して打つことができたときに、子どもたちは運動の楽しさや喜びを味わえるのではないかと考えた。その「考えて打つ」子どもたちの姿を目指して、教師の指導の工夫や授業づくりを探っていくこととした。

II 研究の内容

1 研究の方向性

高橋³は、「体育の学習において、技を達成すること、記録を達成すること、ゲームで勝利すること、作戦を成功させることなど、『できること (achieving)』が子どもたちにとって最大の学習目標であり、楽しさ経験を生み出す源泉である。」と述べている。子どもたちにとって、その楽しさ経験を味わうことはできる喜びや次への意欲となり、それが、生涯にわたって運動に親しむ子の育成につながると考える。

その『できること (achieving)』の過程で、子どもたちが「できるようになりたい。」という思いや必要感をもち、どうすればできるようになるのかを自分の課題として考えること、すなわち主体的に学ぶことが大切だと感じている。

図1の研究構想図にもあるように、子どもたちが、「考えて動く」ためには、まず、それぞれの運動の動き方やよい動きのポイントをつかむことが大切である。その際、「自分でもできそうだ。」という安心感や「やってみよう。」という意欲がもてたとき、理解したことを活用して子どもたちは自分の課題は何かを考えることができる。そして、その課題を意識して動き、技能を習得したときにできる喜びを味わうことができる。

しかし、課題を意識して動いてもうまくできなかつたり、頭ではわかっているけど動きにできなかつたりする。その時こそ、もう一度「自分には何が足りなかったのか、どう動けばできるようになるのか。」と考えまた挑戦する。その繰り返しができる喜びにつながるのではないかと考えている。

この「考えて動く」子どもの姿を引き出すためには、子どもたち任せの授業ではなく、安心して動くことができるような教材教具や考えてもうまくいかなかったときの適切な支援など、「教師の意図的な手立て」が必要となってくる。この「教師の意図的な手立て」を小学校3年から中学校3年までの検証授業を通して、本研究で探っていくこととした。

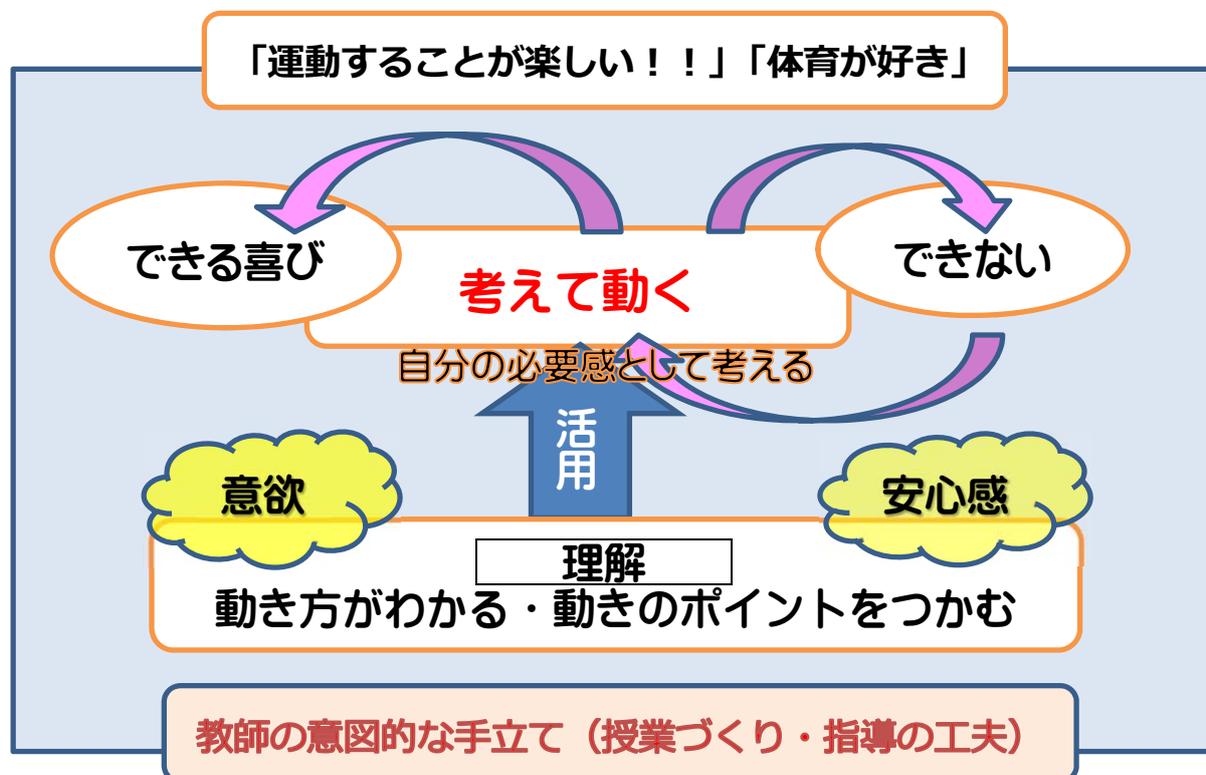


図1 研究構想図

³ 高橋健夫他 「体育科教育」 大修館書店 2011年5月 p.51

2 研究の領域

(1) ベースボール型の特性

ベースボール型は、「打つ」「走る」「捕る」「投げる」動きで構成されるボール運動である。資料⁴にもあるように、ベースボール型の魅力は一人一人が主役になれること、試合中に考え判断しながら動くことができること、チームで立てた作戦が立証しやすいことや振り返りやすいことなどが挙げられる。

また、バスケットボールやサッカーなどと違って、ベースボール型そのものを経験している子は少なく特に小学生段階では児童のほとんどが未経験な状態で単元がスタートできるという良さがある。

資料「みんなが輝くやさしいベースボール型授業」より抜粋

「ベースボール型の魅力」

「捕る」・・・捕り方やポジションを工夫しながら協力して守りゲームを楽しめる。
 「投げる」・・・投げ方や投げる場所を工夫し、走者よりも早くボールをベースに送ることを楽しむ。
 「打つ」・・・遠くに飛ばすことや、どのようにボールを打ったらよいかを工夫して、ゲームを楽しみます。
 「走る」・・・守備より早くベースを奪い、ベースに戻ったり止まったりすることに挑戦します。
 「主役」・・・一人ひとりが攻撃する機会が保障され、運動経験や技量に関わらず、主役になれる楽しさを味わいます。
 「考える力」・・・ベースボール型特有の間を教材として活用し、ルールやチームの特徴に応じた作戦を立てます。
 「解決する力」・・・チームで考えた作戦をもとに、予測・判断して行動することで、様々な課題を解決する力を養います。
 「協調性」・・・どのような作戦を立てたら勝つことができるか、が課題となり、仲間と協力して取り組む態度を育みます。

ベースボール型は、魅力的な教材である一方、一つ一つ身に付けなくてはならない技能も多く、またルールが複雑で、指導者である小・中学校の先生方からは「なかなか技能が上達しない。」「ルールを教えることが大変。」「運動量が少ない。」などの不安な声が挙がることもある。

これらのことから、魅力あるベースボール型の教材をこれからの体育学習でどう指導していくかを本研究の方向性と結び付けて考えていきたいと感じ、研究領域をベースボール型とした。

(2) 「考えて打つ」ことに着目した理由

本研究では、「考えて打つ」ことに着目した。「考えて打つ」とは、子どもたちが打つときに、自分の課題をもち、打つ場面でその課題を意識して打つことである。

ベースボール型の動きの中でも、打つことに着目した理由は、子どもたちの思いや願いを生かしたかったからである。表3のアンケートを単元前にとったところ、どの学年においても子どもたちは打つことを楽しみにし、できるようになりたいと願っていることが分かった。単元が始まる前から、思い通りに打てた時の爽快感や達成感を味わうことを子どもたちは期待しているのである。

このことから、打つ場面で一人一人が「こう打ちたいから、〇〇を意識して打つ。」といった明確な課題をもち「考えて打つ」ことが「できる喜び」につながると考えた。そのための、教師の意図的な手立てをどう講じていくかを探っていくこととした。

表3 できるようになりたいことアンケート

ティーボール（ソフトボール）で、できるようになりたいことや楽しみなことは何ですか。		
小学校3年 (31名)	小学校5年 (27名)	中学校3年 (選択42名)
遠くに打つこと 16名	遠くに打つこと 11名	遠くに打つこと 14名
バットにあてること 11名	バットにあてること 8名	狙ったところに打つ 9名
ボールをとること 2名	打った後上手に走ること 5名	正確に捕球する 10名
ボールを投げること 2名	ボールをとること 1名	狙った所に投げる 7名
	ボールを投げること 1名	その他 2名
	その他 1名	

⁴ 白旗和也他監修「みんなが輝くやさしいベースボール型授業」指導用教材 2015年

(3) 「考えて打つ」姿の定義

検証授業を構想する前に、それぞれの学年における考えて打つ姿について定義することから始めた。

前述にもあるように、「考えて打つ」ためには「打ち方がわかる」ことが必要である。まず、各学年の学習指導要領の内容に沿って、教師が子どもたち全員に伝えることを整理した。次に、教師が伝えたことを理解した上で一人一人が何を課題として打つのかを「考えて打つ」子どもの姿として表4のように定義した。

どの学年においても、打つことに苦手意識のある子は、表4の下線の姿にあるように、教師が伝えたポイントを意識して打つことから始めると考えられる。一方、打つことが得意な子や打つことが上手になってきた子は、表4の波線の姿にあるように、教師が伝えたことに加えて、自分なりの打ちやすい方法を考えて打ったり、その時の状況に合わせて打ったりする姿になってくると考えられる。このように、一人一人の「考えて打つ」姿にも違いがあるのではないかと予想した。

表4 考えて打つ子どもの姿の定義

	学習指導要領の内容	教師が伝えること	「考えて打つ」子どもの姿 例
小学校 3. 4年	ボールをフェアグラウンド内に打つこと。	<ul style="list-style-type: none"> ・バットの握り方 ・基本の立ち位置 ・基本のティーの高さ ・よく見て振ること 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が伝えたポイントを意識して打つ。 ・自分の打ちやすい立ち位置を決めて打つ。 ・自分の打ちやすい高さに合わせて打つ。
小学校 5. 6年	止まったボールや易しく投げられたボールをバットでフェアグラウンド内に打つこと。	<ul style="list-style-type: none"> ・体重移動の仕方 ・水平に打つための巻き戻し打ち 	<ul style="list-style-type: none"> ・体操のリズムを意識して打つ。 ・打つ前に巻き戻し打ちをして、打ちやすい高さや自分とティーとの距離などを合わせて打つ。
中学校 1. 2年	肩越しにバットを構えること タイミングを合わせてボールを打ち返すこと。 地面と水平になるようにバットを振り抜くこと。	<ul style="list-style-type: none"> ・バットの構え方・姿勢 ・トスをされたボールに合わせるタイミング ・バットの振り抜き方 	<ul style="list-style-type: none"> ・体操での構えや姿勢を思い出し意識して構えている。 ・「イチ～ニー～サン」のリズムに体を合わせて打つ。 ・トスに合わせるために自分なりの方法やリズムのとり方で打つ。
中学校 3年 選択	身体の軸を安定させてバットを振り抜くこと。 ボールの高さやコースなどにタイミングを合わせてボールをとらえること。	<ul style="list-style-type: none"> ・投げられたボールへのタイミングの合わせ方 ・打ちたい方向への打ち分け方 (踏み込み方とバットの角度) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「イチ～ニー～サン」のリズムで、ニーのときに投げられるボールの速さに合わせて振り抜いている。 ・打ちたい方向を決めて、その向きに足を踏み込んで打つ。 ・打ちたい方向を決めて、バットがボールに当たった時のバットの角度をどうしたらいいか、意識して打つ。

3 研究の仮説

「考えて打つ」ことができた子どもたちは、できたときの喜びも大きく、学習にも意欲的に取り組むことができるのではないか。

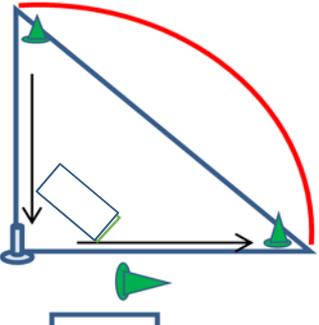
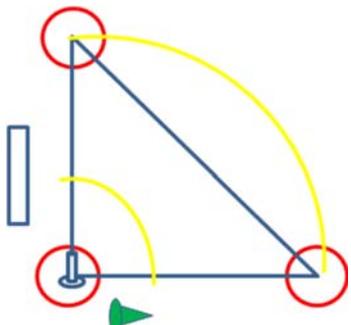
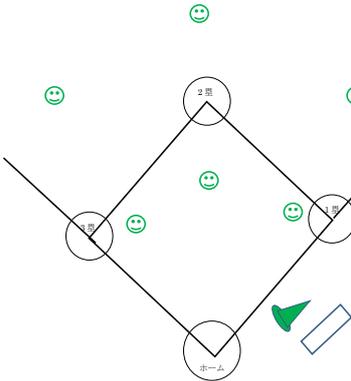
4 研究の方法

- 考えて打つための教師の意図的な五つの手立ての検証と有効性を探る。
- 映像と学習カードから子どもたちの考えて打つ姿の分析を行う。
- 事前事後アンケートから子どもたちの技能の伸びや意欲の高まりの変容を探る。

5 検証授業

(1) 検証授業の対象と教材

検証授業は、小学校3年から中学校3年までの系統性も踏まえて、5本行った。小学校の実践は、すべてティーボールで行い、中学校の実践は中学校2年で味方のトスによるソフトボール、中学校3年で相手の投球によるソフトボールとした。

検証授業の対象	検証時期	領域	教材
川崎市内小学校 3年 1学級 31名	平成27年 11月	ゲーム ベースボール型ゲーム	ティーボール (三角ベース) 1点～6点までとれる 一人ずつ打つ
		<ルール> <ul style="list-style-type: none"> ・全員打ったら攻守交代する。 ・ボールがアウトゾーンにもどってくるまでに、どこまで走れるかで得点が入る。 (最高は2周まわられて6点) ・フライはノーバウンドで捕られたら守備に1点入る。 ・打つ人は、ティーを打ったり、ファウルを打ったりしてしまったら打ち直しをする。 ・打ったら、必ず、コーンにバットを入れて走る。(安全面) ・4回の表裏で試合終了。 ・外野を守る人は内野(三角の中)に入れない。 ・内野を守る人は外野(三角の外)に入れない。 	
川崎市内小学校 5年 1学級 27名	平成27年 7～9月	ボール運動 ベースボール型	ティーボール (三角ベース) ホームベースで1点 残塁制
		<ルール> <ul style="list-style-type: none"> ・全員打ったら攻守交代する。 ・それぞれの塁にボールがたどり着くのが速いか、走るのが速いかでアウトになる。 ・フライをノーバウンドで取られたらアウトになる。 ・ホームベースまで来たら1点入る。残塁していたら、次の回はそこから始める。 ・3回打つのを失敗(空振り、ファウル)をしたらアウトになる。 ・打ったら、必ず、コーンにバットを入れて走る。(安全面) ・3回の表裏で試合終了。 ・外野を守る人は内野(三角の中)に入れない。 ・内野を守る人は外野(三角の外)に入れない。 	
川崎市内小学校 6年 1学級 24名	平成27年 11月	ボール運動 ベースボール型	ティーボール (四角ベース) ホームベースで1点 残塁制
		<ルール> <ul style="list-style-type: none"> ・全員打ったら攻守交代。最後のバッターが残塁できたら次の回はその残塁からスタート。 ・打ったら、1塁に走る。守りがボールをアウトベースに運ぶまで、2塁・・・と走ることができる。走ることができないと判断したらその塁でストップして残塁する。 ・ホームまで帰ってきたら1点入る。 ・フライはノーバウンドで捕られたら打った人はアウト。塁にいた人は元の塁に戻る。 ・どこかの塁にボールがたどり着いたら、走者はそれ以上進塁できない。 ・打ったら、必ず、コーンにバットを入れて走る。(安全面) ・4回の表裏で試合終了。 ・外野を守る人は内野(四角の中)に入れない。 ・内野を守る人は外野(四角の外)に入れない。 ・アウトベースはそれぞれの塁の円の中とする。 	
川崎市内中学校 2年女子 35名	平成27年 10月	球技 ベースボール型	トスによるソフトボール ほぼ正規のルール
川崎市内中学校 3年選択 42名	平成27年 9月	球技 ベースボール型	相手ピッチャーによるソフトボール ほぼ正規のルール

(2) 教師の意図的な五つの手立て

「考えて打つ」子どもの姿を引き出すため、以下の教師の意図的な五つの手立てを講じることとした。

- ①教師が伝えることの整理（全学年）
- ②試合中心の道すじの工夫（全学年）
- ③ティーボール体操・ソフトボール体操の開発（小3・小5・中2）
- ④映像機器の活用（小3・小5）
- ⑤学習カードの工夫と教師の支援（全学年）

この五つの手立てには、すべての学年で講じたものと、子どもたちの実態に合わせて学年ごとに講じたものがある。③の手立ては、ティーボールに初めて出会う小学校3年、苦手意識のある児童が多かった小学校5年、女子生徒のみのソフトボールを実践した中学校2年の検証授業で講じた手立てである。④の手立ては、担任が体育の授業を行う小学校において、朝の会や給食時間などに映像を見ることができるといふ利点を生かして講じた手立てである。

①教師が伝えることの整理（全学年）

検証授業の前に、「打つこと」「走塁」「守ること」のそれぞれの動きのポイントについて教師が全体にいつ伝えていくのか整理した。打つことは主に単元の始め、守ることに関しては試合の様相を見ながら、随時伝えていくこととした。

<打つこと>

打つことに関しては、前述したようにどの学年においても単元が始まった第1時や第2時に伝えた。単元中盤や後半にも、子どもたちの様子を見て、よりよい打ち方のポイントが見つかり、加えて伝えていくようにした。後から付け加えたことは、表5の中に星印で示している。

表5 打つことに関する教師が伝えること

	教師がクラス全体に伝えること	
小三	<ul style="list-style-type: none"> ・打つ時にティーの横に立つと打ちやすいことを伝える。 ・ティーの高さはへそ位の高さが打ちやすいことを伝える。 ・バットの持ち方は利き手を上にすると打ちやすいことを伝える。 ・ボールをよく見て思い切りバットを振ることを伝える。 <p>(主に第1時・2時)</p>	
小五・六	<ul style="list-style-type: none"> ・打つ時にティーの横に立つと打ちやすいことを伝える。 ・ティーの高さはへそ位の高さが打ちやすいことを伝える。 ・バットの持ち方は利き手を上にすることを伝える。 ・ボールをよく見て思い切りバットを振ることを伝える。 <p>(主に第1時・2時)</p> <p>★ティーの高さはへその少し下で、立ち位置は前足がティーのあたりになるように立つとよいことを伝える。 (単元の進んだころ)</p> <p>★巻き戻し打ちが有効であるということを子どもの姿を通して伝える。(単元の進んだころ) *巻き戻し打ちとは、ティーの高さを自分の打ちやすい高さに調節し水平に打つための動作で、児童が考え出したものである。</p>	この4つに関しては、本来は中学年の段階で身に付けるべきことであるが、実態を加味して伝えた。
中二女子	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールをよく見てタイミングを合わせることを伝える。 ・バットを肩越しに構えることや体重移動をして打つことを伝える。 <p>(主に第1・2時)</p> <p>★トスされたボールに対して、「イチ、ニイ、サン」のリズムをとると打ちやすいことを伝える。(第3・4時)</p>	
中三選択	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の技術に応じたバットの握り方について伝える。 ・投げられたボールに対してどうバットを振ればよいのか、タイミングのとり方を伝える。 <p>(主に第1・2・3時)</p> <p>・打ちたい方向へ打つ打ち方について伝える。(第4・5時)</p>	

<走塁に関すること>

小学校・中学校で共通して始めに「全力で走ること」を伝えた。その他の走塁のポイントとしては、試合の状況に応じて判断して走ることが求められる。そのため、試合を通して子どもたちが走塁につい

て判断できるよう、試合中に個別に声をかけたり全体に伝えたりした。

表6 走塁に関する教師が伝えること

教師がクラス全体に伝えること	
小三	・打ったら全力で走ることを伝える。(第1時)
小五 小六	・打ったら全力で走ることを伝える。(第1時) ・どこまで走るかを判断して走ることを伝える。(第3時)
中二 女子	・ベースまで全力で走り、しっかりベースを踏むことを伝える。(第1時) ・どこまで走るかを判断して走ることを伝える。(第3時)
中三 選択	・スピードを落とさずに弧を描くように左肩を下げ、塁間を走ることを伝える。 (第1時)

今日の試合はどうでしたか？ 打ったあとの走る判断は上手にできましたか？

できた。自分が打つ前にランナーがいたときはよく敵の位置を確認してから指示をくれた。

<守りに関すること>

どの学年においても、一番難しいのは守りである。打つ技能の向上が見られた単元中盤あたりから「勝つために、守りもうまくなりたい。」という声が挙がった。守りは、打球や走塁の状況に応じて動くことが求められるため、試合を通してそれぞれの状況でどう動けばよいか気付いていけるようにした。

表7 守りに関する教師が伝えること

教師がクラス全体に伝えること	
小三	・打つ人をよく見て、瞬時に動けるように腰を落として構えていることを伝える。(第2時) ・ボールの飛ぶ方向に走り、ボールを捕ることを伝える。(第3. 4時) ★アウトベースにできるだけ早くボールがたどり着くには、自分はどう動けばよいか打球の状況によって判断することをビデオ映像で見ながら伝える。(単元後半・朝の会)
小五 ・ 六	・ボールの落下地点にすばやく移動して、正面に入ることを伝える。(第3. 4時) ・どの塁でアウトにするのか、判断して守ることを伝える。(単元後半) ★ホームでアウトにできるように、誰がホームカバーをするのかを状況に応じて判断することをビデオ映像で見ながら伝える。(単元後半・朝の会)
中二 女子	・学習カードにいろいろなケースでの守備の仕方を記して理解できるようにする。(単元前半) ・試合を止めてこの状況ではどう守備が動いたらよいかを一つ一つ確認する。(単元前半・単元中盤)
中三 選択	・試合を通して、実際に色々な守備の場面での動き方を身に付けることができるようにする。(単元中盤・単元後半)

表5、表6、表7のように教師がいつ何を伝えるのか整理したことは、教師にとっても子どもたちにとっても有効だった。教師にとっては、身に付けるべき技能の多いベースボール型の授業において、「今日は〇〇をしっかりと伝えよう。」と1時間1時間の指導内容が明確化したことである。子どもたちにとっては具体的な課題をもち、考えて打つことにつながったことである。小学校6年のある児童は、教師が第1時にバットを思い切り振るといふ動きのポイントを伝えたところ、今日のめあてに「バットを耳の後ろに構えて、勢いをつけて大きく振る。」と自分の言葉で具体的に書くことができ、実際の映像でもその姿が見られた。

②試合中心の道すじの工夫 (全学年)

これまで、中学校の実践では、50分の授業時間を準備運動から始まり、全体での課題別練習とチームでの課題別練習を行い試合という流れが多かった。特に単元の前半は基礎基本の技能の定着のために練習を主に行ってきた。

今回の検証授業では、準備運動と打つ練習をしてすぐに試合という流れで行った。打つ練習を毎回行ったことで、自分の課題を見つけいろいろな打ち方を試す生徒が増えた。また、試合時間を長くしたことで、試合中の打席数が保障されるので、緊張感の中でもしっかりと自分の課題を意識して打つことができ

るようになり、そのことが打つ技能の習得につながった。

一方、中学校では、ソフトボールの正式なルールに近づくため、守備の場面で走者や打者に応じて守り方がめまぐるしく変化する。そのそれぞれの場面での動き方を理解し習得していく必要があった。そこで単元前半の試合は、試合中に起こりうる様々なケースに対応できるような試合形式（ケース別ゲームと名付けた）とし、生徒が試合を通して守備の動き方も習得できるようにしていった。

以下に示したものが、今回実践した各学年の道すじである。試合中心の道すじにしたことで、打つ回数が増え「考えて打つ」ことにもつながった。どの学年でも試合をしたいという子どもたちの思いは共通であり、検証授業後のアンケートでも試合中心で楽しかったという記載が多くあった。

<小学校3年 ティーボール>

1～4時	5～7時
・ティーボール体操	・ティーボール体操
・ゲーム (基本のゲーム)	・ゲーム (規則の工夫)

<小学校5・6年 ティーボール>

1～4時	5～7時
・ティーボール体操	・打つ練習
・ゲーム	・ゲーム

<中学校2年 女子 ソフトボール >

1	2	3	4	5
・ソフトボール体操 塁間を走る キャッチボール 打つ動作	・ソフトボール体操 ・トスバッティング	・ソフトボール体操 ・トスバッティング	・ソフトボール体操 ・トスバッティング	・ソフトボール体操 ・トスバッティング
・トスバッティング	・何点とれるかゲーム 打者一巡	・フィルダーベースボール 打者一巡	・フィルダーベースボール 打者一巡	・ランナー2塁ゲーム 打者一巡

6 ~ 10
・ソフトボール体操
・トスバッティング
・3アウト制のソフトボール
リーグ戦も行う。

<フィルダーベースボール>

打者走者を守備側が先回りし進塁を阻止する。守備の状況判断を、試合を通して身に付けることができる。

ルール

守備側は、打球を捕球後、走者の先回りをしてアウトにする。その際、ベース近くの円にもう一人の守備者が入ることがアウトの条件となる。

もう一人の守備者が入ることによって正規のルールとなったときに、カバーの動きも試合を通して身に付けることができる。

<ランナー2塁ゲーム>

走塁の判断と守備の状況判断を、試合を通して、身に付けることができる。

ルール

毎打席ごと、チームの誰かがランナー2塁にいる状態で打者は打つ。2塁にいたランナーはフライキャッチされた場合は2塁に戻る。

守備側は、3塁か本塁でのアウトを狙うが無理なときは打者のアウトを狙う。どちらかのアウトをとればその攻撃は終了

③ティーボール体操・ソフトボール体操の開発（小3・小5・中2女子で検証）

この体操は、打つ、投げる、捕るというベースボール型の試合を行う上で必要な基本動作が自然と身に

付くように本研究会議で開発したものである。今までは、キャッチボールやトスバッティングなどの練習を通して基本動作の習得を目指してきた。しかし、今回の検証授業では、これらの動きを音楽に合わせてどこでも誰でもできるような2分半の体操にし、小学校3年と小学校5年でティーボール体操、中学校2年でソフトボール体操と命名して構成した。

＜ティーボール体操＞

小学校3年と小学校5年で取り組んだ。単元が始まる前から、体操のビデオを毎朝見ながら真似して行った。聞き慣れた音楽で誰でもできる簡単な体操だったため、ティーボールがうまくなる体操というよりも、楽しみながらその体操を行う児童が多かった。

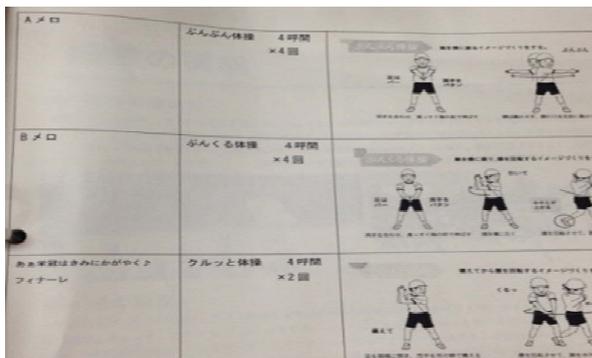


図2 ティーボール体操



図3 朝の会の様子

実際の授業が始まると、毎時間準備運動としてその体操を行った。子どもたちは、試合が始まり、実際に打つ場面になると、「ティーボール体操の動きだよ。」と声をかけ合う姿が見られた。単元が始まる前は打つことに苦手意識のあった児童の多くが、ティーボール体操で身に付いた動きで打ち、初めて打てたことで安心感につながり、次への意欲も高まっていた。

表8 着目児の単元始めと終わりの「考えて打つ」様子

		小学校3年 Aさん	小学校3年 Bさん	小学校5年 Cさん	小学校5年 Dさん
児童の実態		体を動かすことは好きだが、頭でわかってはなかなか動きができない。	運動は得意ではないが、できるようになるためにいろいろなことを試してみようとする。	スポーツ万能で、意識して動かなくても、自然とできていることが多い。	「ティーボールは苦手。やりたくない。」と言っていて自信がまったくない。
児童のふりかえり	第一時	体そうのまねをすると打つことができた。	遠くに打ちたいと思って打った。	打つときは人のいないところを意識して打った。	自分の利き手を上にしてバットを持つとうまくいくと分かった。
	第七時	ティーボール体そうをやっているより力いっぱいふって遠くに打てた。	ティーボール体そうの動きを生かして遠くに打てた。	ボールの上の方をたたいて速いゴロをとばして、確実に塁に出る。	体重移動を意識しました。体重移動をすると、体操の動きになって遠くに飛ばせました。
授業の様子		単元を通して、体操の動きをやればうまく打てると信じて意識し続けた。最後の試合では体操の動きに自分なりの打つポイントを考えて力いっぱい振ったことで遠くまで打つことができた。	遠くに打ちたいという願いのもと、毎時間いろいろな打ち方を試してきた。単元中盤あたりにティーボール体操の動きをやるとうまくいくことに気付いて最後は遠くへ打てるようになった。	野球経験者ではないが、はじめから打つことがうまかった。単元終盤にうまく打てなくなり、ティーボール体操の動きやティーの高さなどにこだわり、考えて打つ姿が見られた。	打つことがはじめはうまくできなかったが、どんどん上達し、自信をつけていった。めあても具体的になり、自分ができるようになりたいという気持ちがあてにも表れていた。

ティーボール体操は、初めてベースボール型に出会う小学校3年と、打つことに苦手意識を持っていた小学校5年の中でも特に女子児童に効果的だった。「打つためのポイントが頭ではわかっているけど、実際の打つ場面になるとどう動いたらよいかうまく体を操作できない。」そんな思いをもっている児童にはとても効果的だった。楽しみながら音楽に合わせて体を動かしているうちに自然と動きが身に付いて、打つ場面ですぐにその動きが自然とできることが実証できた。

基本的な動きができるようになると、児童の意欲が高まり、「もっと遠くに、もっとねらって打てるようになりたい。」という思いが生まれてきた。そのような時こそ、教師の支援が必要になってくる。一人一人に合った立ち位置やティーの高さやバットの振り方などを伝えたり、気付きを促すような言葉かけをしたりしていった。

＜ソフトボール体操＞

今回、検証授業を行った中学校2年の女子のみの授業は、ソフトボール部の生徒が一人もいなかった。また、1年次に男女共修でソフトボールの経験はあるが、その時は男子の動きに頼る女子生徒が多かったという現状もあった。そのため小学校の実践を生かし、新たにソフトボール体操の開発を行い取り入れていくことで、学習経験の少ない生徒でも安心感をもって取り組めるのではないかと考えた。

しかし、中学校では教科担任制であるため朝の会でビデオを流しながらソフトボール体操を行うことはできない。そこで、第1時にソフトボール体操の動きである塁間の走り方やキャッチボールの仕方、打ち方の基本動作を教師が伝え、次時からは、校庭に出てきてすぐにその動きを音楽に合わせて行うことを伝えた。今までの準備運動はチームで校庭を走り屈伸や伸脚など行うという流れをとってきたが今回は準備運動代わりのソフトボール体操をクラス全員で行った。

しかし、ソフトボール体操を行っても、いざ試合となると、打つ場面で効果が上がらなかった。ビデオ分析を行い、その原因を探っていくと、ティーボールで止まっているボールを打つ



図4 タイミングをとるために改良した動き

動きと、ソフトボールでの投げられたボールを打つ動きの違いに気付いた。投げられたボールをよく見てタイミングを合わせて打つだけでは、まったく打てないのである。具体的にリズムを体で覚えることが大切だと考え、第3時からのソフトボール体操には改良を加えた。図4のように軽くジャンプをして腰を落として構え、「イチ、ニイ、サン」のリズムをとってバットを振る動きを取り入れた。

このように改良を加えたことで、試合でもトスをされたボールにタイミングが合い、体重移動をして打つことができた。また、小学校の実践と同じように試合の中で打てる楽しさを味わうことができるようになると、「次はこう打ちたいから、こうやってみよう。」と自分の課題を具体的に設定し、考えて打つことができた。

④映像機器の活用（小3・小5）

自分がどんな打ち方をしているのかビデオや写真を見て把握することが「考えて打つ」ことにつながると考え、小学校3年と小学校5年で映像機器を使った手立てを講じた。

まず、初めて打った瞬間を撮った写真を一人一人に配り、学習カードに貼った。小学校3年の児童は、写真をもらったこと自体を喜び、うれしそうに友達同士で写真を見合い、よい打ち方を考えている姿が見られた。

小学校5年の児童は、写真を貼った学習カードに自分なりの言葉で打つポイントを書いていた。また、教師がその言葉に対してコメントを返すことで、子どもたちは具体的な打つ課題を見つけることができた。

次に、打っている時の映像をクラス全員に見せたとこ、特に小学校5年の児童は自分の打つ映像に見入って自分の打ち方のよいところや改善点を見つけることができていた。また、友達の打

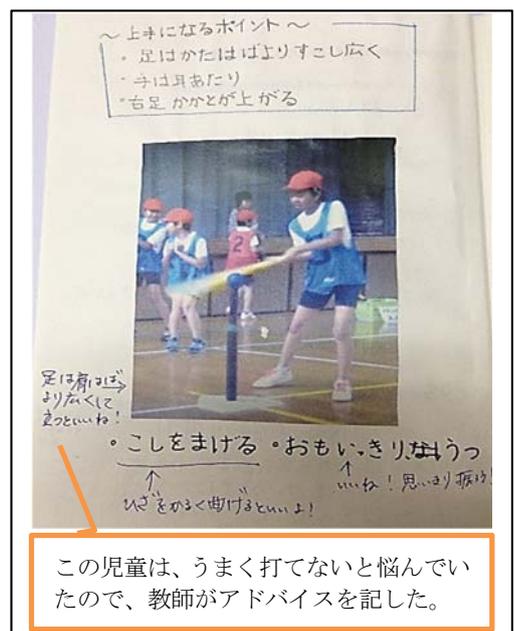


図5 写真を貼った学習カード

つ映像を見ることで、「こうやって打てばうまく打てるのか。」と友達の打ち方から自分の課題を見つけていくこともできた。

このように、写真やビデオなどの映像機器を活用することは、子どもたちが自分自身の打ち方を把握する上でとても効果的だった。自分の打ち方を把握することで、次はどう打ったらうまくいくのか、具体的な課題をもつことができた。



図6 映像を見たことによるめあての変化

⑤学習カードの工夫と教師の支援（全学年）

短い授業時間内では一人一人の子どもたちが今何を課題としているのか、次は何を意識すればうまくできるようになるのかを教師が把握していくのは難しい。そのため、普段から学習カード（中学校では学習ノート）を作成し、一人一人の様子を把握していくようにしている。

今回の検証授業でも、「考えて打つ」子どもの姿を引き出すために、授業前に小学校ではめあて、中学校では課題を具体的に書くように指導した。また、授業後は何を意識するとうまくいったのか振り返って書くことができるような学習カードを作成し、単元を通して活用していった。

学習カードに記す教師のコメントは、子どもたちの意欲につながり、一人一人に合った課題の設定に結びつくものと考えている。検証授業でも、励ましや称賛のコメントを記すことはもちろんだが、子どもたちが次の課題を意識できるように、具体的な助言や気付きを促すようなコメントを書くようにした。

授業時間内ではなかなか全員に声をかけることは難しいが、学習カードを見ることで子どもたちの思いや、どんなことが上手になりたいのかを把握することができる。その際、教師からの助言や気付きを促すコメントを記すことが、子どもたちの考えて打つ姿につながった。

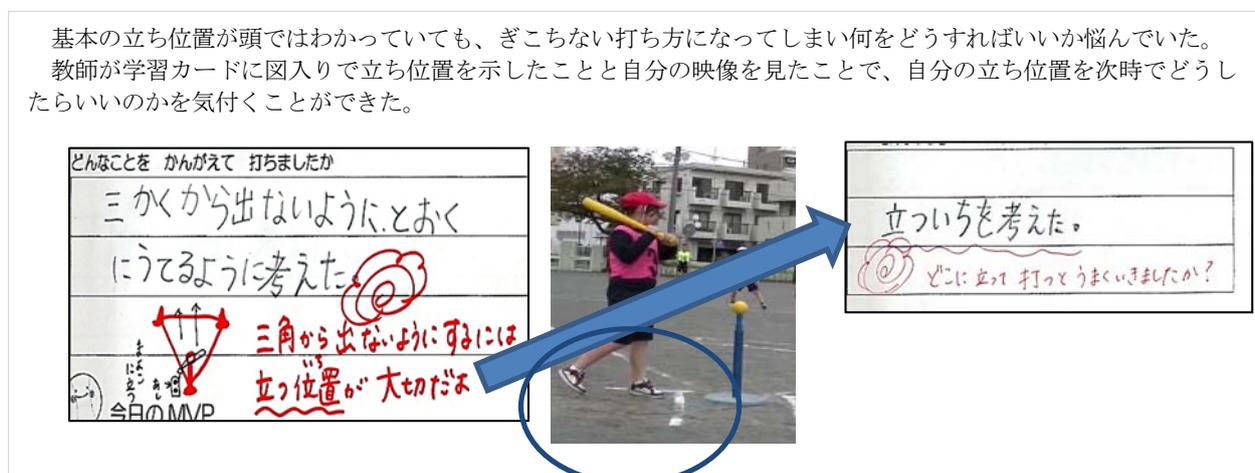


図7 教師のコメントを具体的に記した学習カード

表9 中学校3年 学習カードへの教師のコメント

	学習カードへの教師のコメント	生徒が意識したこと
Eさん 野球部で打つのが得意な生徒	「どうやったら狙い打ちができるのか、具体的に目標をもってやってみよう。」と気付きを促すコメントを記す。	場面を考えて、足の向きを変えたり、バットを平行に出したりすることを意識してランナーを進める。
Fさん 打つことに苦手意識のある生徒	「ニイの時に右足に体重を乗せてみよう。」と具体的ですぐに試すことのできることを一つだけ記す。	常に「イチ、ニイ、サン」のリズムを数えることを意識する。
Gさん 野球部ではないが運動が得意な生徒	「構えるとき左肩を下げて、腰をしっかり回してスイングしよう。」と、生徒の実態に合った助言を記す。	前回できなかった左肩のこと、腰を回すということ、ボールをしっかり見て、軸をとらえることを意識する。

中学校3年の検証は、球技の中からソフトボールを選択した男女混合で授業を行った。そのため、野球部の男子、ソフトボール部の女子や、中学校2年の時にソフトボールの楽しさを感じた生徒、苦手だができるようになりたい生徒など、経験に差があった。そこで教師は、一人一人の実態やうまくなりたいたいことを把握して、学習カードのコメントも工夫していった。

表9にもあるように、野球経験者のEさんは「狙い打ちをしたい。」という思いがあったので、教師は狙い打ちをするためにどう打てばよいのか、気付きを促すコメントを記している。打つことに苦手意識のあるFさんには、具体的ですぐ試してみることができるような助言を一つだけ記すようにした。そして、野球経験者ではないが比較的運動が得意なGさんは、バットを振るときに左肩が上がり水平に打てないことを教師が把握し、この生徒に合った助言のコメントを記した。

このように、経験に差のある生徒が集まった選択授業において、一人一人に合わせた支援は効果的であり、大切であることを改めて実感した。授業時間内に一人一人に合わせた言葉かけを全員にすることは難しいが、学習カードに一人一人の今の技能に合わせたコメントを教師が記すことで、次にどう打ったらいいか「考えて打つ」ための手がかりとなった。

すべての検証授業を終えた後、学習カードを見直すと、教師のコメントにはいくつかのパターンがあることが分かった。このコメントのパターンを事前に把握しておく、一人一人の実態に合わせたコメントを記せるということが分かった。

表10 学習カードにおける教師のコメント分析表

	教師のコメント	有効な場面
励まし	<ul style="list-style-type: none"> ・次もがんばれ！ ・君なら次も打てる！！ ・次は絶対ホームランだよ！ 	<p>打つことに苦手意識のある子や、少しの進歩があった子には特に有効であり、意欲につながるコメントである。</p> <p>しかし、考えることや気付くことにはつながらないので、励まし・称賛のコメントだけでなく、そのあとに助言や気付きを促すコメントを記すと効果を発揮する。</p>
称賛	<ul style="list-style-type: none"> ・上手だったね。 ・うまく打っていたよ。 ・ナイス！ 	
具体的な助言	<ul style="list-style-type: none"> ・立ち位置を〇〇にしてみよう。 ・体重移動を意識しよう。 ・腰をひねって、バットを振り抜こう。 ・イチ、ニイ、サンのリズムをみんなで言いながら打ってみよう。 	<p>助言のコメントは、どの子にも有効である。できるだけ、一人一人の子どもの姿を把握して書いていきたいコメントである。</p> <p>気付きを促すコメントは、考えて打つためにはどの子にも有効だが、まだ「動きがわかっていない」段階の子には、助言のコメントの方が有効である。</p>
気付き	<ul style="list-style-type: none"> ・ティーの高さはどこが打ちやすかったかな？ ・狙ったところに打てたのは、何を意識したのかな ・うまく打てたのはなぜだろう。 	

6 検証授業後の考察

(1) 学習カードと映像の分析

子どもたちが打つ場面で自分の課題を意識して打つことができているかを見取るため、検証授業後に映像分析を行った。

例えば、図8にある小学校5年Hさんは、「水平にバットを動かすことを意識した。」と学習カードに記述していた。実際の映像を見ると、しっかりと水平にバットを振っていることが分かった。自分の課題を意識して運動していることが分かる。



図8 Hさんの打つ様子と学習カード

下の表11は、第1時・3時・6時において、一人一人が打つ時に意識していたことが実際にできていたかビデオ分析した結果の一部である。実際にできていた児童には丸印で記している。

第1時は、ティーボール体操を思い出すなどといった漠然としたものや、教師が助言したポイントをそのまま記述している児童が多かったが、第6時になると自分の今までの打ち方を生かして、どう打てばいいのかを具体的に考えている。このように、単元が進むにつれて、打つために意識していることが変化している。これは、打つための思考力の高まりとして見取れるのではないだろうか。

表11 小学5年 児童の学習カードの記述と映像の比較 (一部の児童抜粋)

	第1時	映像	第3時	映像	第6時	映像
Iさん	足は、肩幅くらいに開けばよい。		打つときに足を肩幅まで広げて、体重移動をすること。	○	立ち位置を変えて、巻き戻し打ちと、バットの芯に当てることを意識しました。	
Jさん	相手のいないところに勢いのある速いボールを打つこと。自分のタイミングで打つこと。	○	ティーと自分の距離、体重移動などを意識しました。	○	右に打とうと思ったら右の方に足をむけました。そうしたら三打席とも右方向に飛んでいきました。	○
Kさん	ティーではなく、緑ボールに当てること。		巻き戻し、体重移動で打ったら、ホームまで走れて楽しかった。	○	ボールをよく見て、巻き戻し打ちをすること。	○
Lさん	ボールをじっと見つめて、思いっきり打つ。	○	このあいだより打てなかったけど、打てたときは、ボールをよく見て打つと打てた。	○	今までよりも、立ち位置を後ろにしたらうまくなった。	○
Mさん	ティーボール体操の動きをすることで打てるのと、ボールをよく見て打つとうまいく。		ティーの横に立って、巻き戻し打ちをしたらうまくだてました。	○	ボールを最後まで見て、体をふりきることを意識しました。	○
Nさん	ボールをよく見て、足を開いて打つこと。	○	体重移動をしたら、比較的よく飛んだ。	○	今回はうまくいかなかった。ティーの高さが大事だったかもしれません。	
Oさん	自分の利き手を上にしてバットを持つとうまいく。	○	ボールをよく見て、遠くを見て打った。	○	体重移動を意識しました。体重移動をすることで、体操の動きになって速くに飛ばせました。	○
Pさん	踏み出す足に力を入れた。	○	ボールがバットに当たるまでずっとボールを見ていたらうまくだてました。	○	遠くに飛ばしたいと思っていたので、地面と平行にフルスイングをしました。	○

(2) アンケートによる分析

今回、高橋⁵⁾の著書にある調査方法を参考にし、小学校5年児童と中学校2年生徒を対象にアンケートによる分析を行った。アンケートは単元が始まる前と終わった後に同じ項目で語尾を変えたものを作成した。それぞれのアンケート項目に対して、5点満点で「5 とても思う」「4 少し思う」「3 どちらでも

⁵⁾ 高橋健夫他『体育の授業を観察評価する』 明和出版 2003年 pp8-11

ない」「2 あまり思わない」「1 全然思わない」の5段階から選択し、点数の平均を出したものが表12表13に記してある。

表12表13を見ても分かるように、ティーボールやソフトボールの授業を楽しみ、好きになったと答える子どもたちが多かった。また、「課題を意識して打つ。」という項目や「バットにボールを当てることができた。」や「ボールを遠くまで打てた。」という項目は、どちらも数値の伸びが見られた。このことから子どもたちは、単元が終わる頃には自分の課題を意識して打つことができ、技能も向上していることが分かった。

表12 小学校5年 アンケート結果

アンケート項目	(事後のアンケートの語尾)	単元前	単元後
ティーボールの授業が楽しみである。	(楽しかった)	3.96	4.85
ティーボールの授業が好き。	(好きになった)	3.81	4.78
自分で考えて打つことができそうだ。	(考えて打った)	3.85	4.63
友達に打つコツを教えられそうだ。	(打つコツを伝え合った)	3.15	4.33
ボールをバットに当てられそうだ。	(打つことができた)	3.59	4.78
ボールを遠くまで打てそうだ。	(遠くまで打てた)	3.11	4.3

表13 中学校2年 アンケート結果

アンケート項目	(事後のアンケートの語尾)	単元前	単元後
ソフトボールの授業が楽しみである。	(楽しかった)	3.93	4.70
ソフトボールの授業が好き。	(好きになった)	3.96	4.67
友達と励まし合いながら試合ができそうだ。	(試合ができた)	3.74	4.54
課題を意識して打つことができそうだ。	(意識して打った)	3.35	4.41
投げられたボールをバットに当てられそうだ。	(当てられた)	3.77	4.83
ボールを狙ったところへ打てそうだ。	(打てた)	3.08	3.85

(3) 学習カードの振り返りによる分析

学習カードに子どもたちが記した文章を見ていくと、発達の段階ごとに違いはあるが、それぞれの学年において、考えて打つことやできるようになった喜びや楽しさについて書かれていた。

＜小学校3年 授業後の振り返り＞

小学校3年の多くの児童が、自然と友達のよい打ち方に目を向け、自分が打つときのめあてに取り入れる姿が見られた。また、打つことができるようになると、投げることや捕ることなど、他のこともうまくなりたいという次への意欲につながるということが分かった。

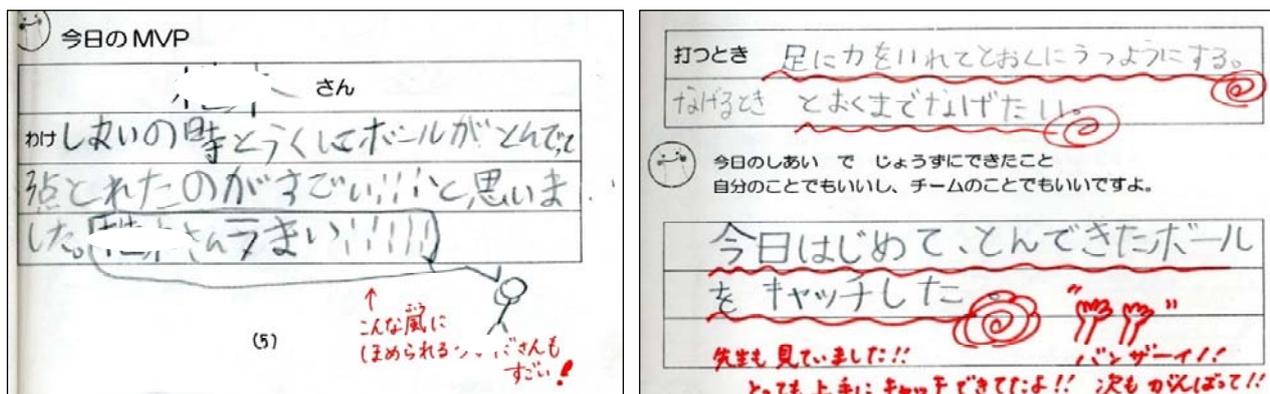


図9 小学校3年 児童の学習カード

＜小学校5年 単元後の振り返り＞

小学校5年の児童は、図10の下線にもあるように、「考えて動くことが楽しかった。」という振り返りを書いてきた。ベースボール型の授業を楽しみ、どう動けば試合の時に守りも走塁もうまくできるのかを考えている姿が見て取れる。

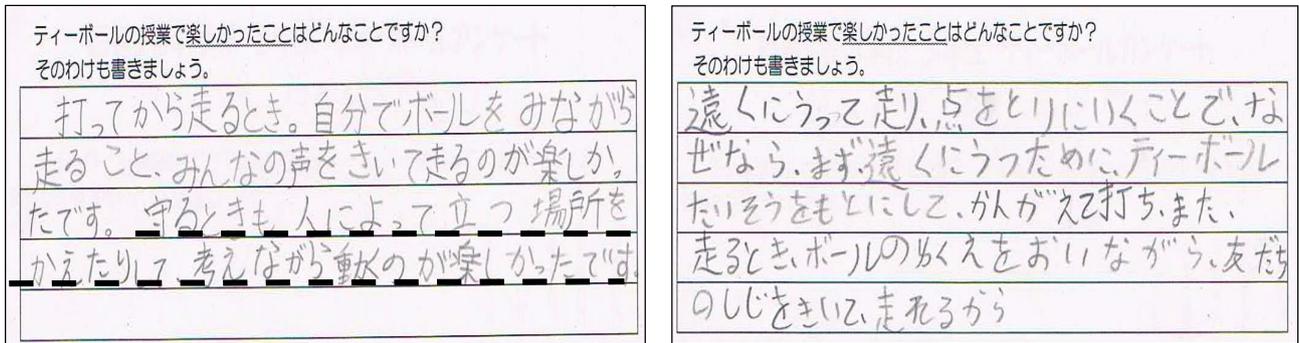


図10 小学校5年 児童の学習カード

＜中学校2年 単元後の振り返り＞

中学校2年の女子生徒は、図11のように、ソフトボールの授業に消極的だったが、不安なことが取り除かれたことで、打つことに対して自分の課題をもって取り組むことができたことと記す子が多かった。またチームのメンバーからのアドバイスを聞いたり、一緒に動いたりすることで、自分の課題をもち、意識して動くことができ、中学校段階では友達同士の学び合いも「考えて打つ」ために大事であることが分かった。

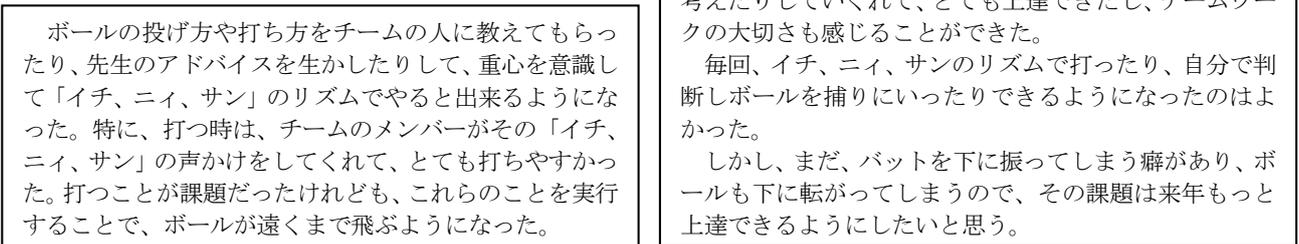


図11 中学校2年 生徒の学習カード

＜中学校3年 授業後の振り返り＞

中学校3年の生徒は、打つことに苦手意識のあった女子生徒も得意な男子生徒も、それぞれが自分の打ち方を分析して、自分の今の力に合った課題を見つけることができていた。

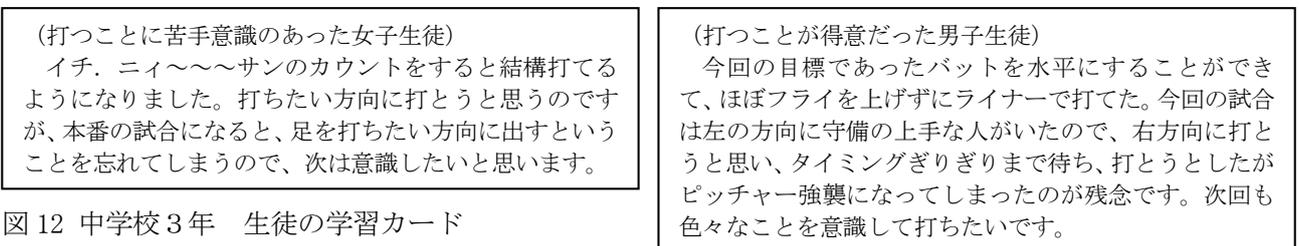


図12 中学校3年 生徒の学習カード

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果と課題

小学校3年から中学校3年までの検証授業を通して、「考えて打つ」子どもの姿を目指し、教師の意図的な五つの手立てを講じてきた。以下にその成果と課題を示す。

①教師が伝えることの整理（全学年）

身に付けるべき技能の多いベースボール型の単元で、学年ごと身に付けるべき内容を整理し、教師が1

時間1時間で何を伝えたらよいのかを明らかにすることができた。このことにより、子どもたちは1時間毎のめあてや課題を明確にもつことができるようになった。めあてや課題を明確にもつことは、実際に動くとき、そのめあてや課題を意識して動くことができるということも映像分析で実証することができた。

しかし、本研究では、技能の内容すべてを子どもたち全員におさえることはできなかった。子どもたちの実態を見て、本来なら前の学年で身に付けるべき技能の内容も入れる必要があり、伝えることが多くなってしまったからである。小中9年間の体育の系統性を意識した指導の大切さを再認識した。

②試合中心の道すじの工夫（全学年）

試合中心の道すじにしたことは、特に中学校で有効だった。これまで、技能の定着を目的として行ってきた課題別練習のよさもあるが、ベースボール型は、試合を通して身に付いていく技能も多いため、練習時間よりも試合時間を長くとっていくことが、技能の向上につながった。

中学校3年生徒の学習カードに「今年のソフトボールは、練習ではなく試合が多かったのでとても楽しかった。」という記述があった。子どもたちも試合をすることを楽しみ、試合の中で技能が向上していくことがうれしかったのだと感じた。

③ティーボール体操・ソフトボール体操の開発

本研究では、この体操の開発が教師の意図的な手立ての中でも一番の成果となった。「誰でも、気軽に主運動につながる基礎的な動きが自然と身に付くようなもの」を子どもたちに提示したいという教師の思いから体操を作成した。その結果、運動が得意な子も苦手意識があった子もそれぞれが自分のめあてや課題をもつためのきっかけとなった。

しかし、中学校では体操というと、恥ずかしがって取り組むこと自体を嫌がる生徒がいるため、生徒の実態に合わせて、主運動につながるようなものも今後は開発していく必要がある。

④映像機器の活用

映像機器による手立ては、子どもたちが自分の打ち方を把握し、課題を見つけることができ、有効だった。打つ動きは一瞬で終わってしまうため、打った瞬間の写真を学習カードに貼ることで、自分の立ち位置やティーの高さ、バットを振る方向などの課題を見つけやすくなった。また、友達の映像を見たことでよい打ち方に気付き自分の課題に取り入れる子もいた。

今回は、小学校3年と小学校5年に講じた手立てだが、小学校3年では、自分の映像が流れることや、写真をもろうこと自体を喜ぶ子が多かった。小学校3年の児童にとっては、「考えて打つ」ための手立てというよりも、「早く試合がしたい。」など、次時への意欲を高めるための手立てとなった。小学校の高学年から中学校段階の児童生徒には映像機器を活用することは、「考えて打つ」ための手立てとして有効であるため、今後は中学校でも講じていきたい。

⑤学習カードの工夫と教師の支援（全学年）

学習カードに教師のコメントを記すことは、全ての子どもたちに有効だと再認識できた。本研究では、教師がどのようなコメントを記せば、「考えて打つ」姿を引き出せるのか教師のコメントを分析していった。その結果、教師のコメントは、「称賛」「励まし」「助言」「気付きを促す言葉」の4種類が主に書かれていて、その中でも「助言」や「気付きを促す言葉」を書いていくことが有効だと分かった。

しかし、今回の検証授業で毎時間教師のコメントを記すことができなかったことは課題として残る。短い一言でも教師がコメントを記していくことは、子どもたち一人一人に合わせた支援となるため今後も努力していきたい。

今回の研究は、打つことに着目したが、打つことができるようになると、他の技能も確実に向上することが分かった。それは、打つ技能が向上すると得点が多く入り、次は勝つために「どう守備をすればよいか。」「どう走塁すればよいか。」について、自然と子どもたちが考え、動いていたからである。

ある検証クラスでは、授業前の昼休みから自然と打つ練習が始まり、試合中は進んでチーム内で声をか

け合い、学び合う姿が見られた。この姿こそが、「生涯にわたって運動に親しむ子」につながるのではないだろうか。「考えて動く」ことが「できる喜び」になり、子どもたちが自ら運動に取り組んでいる、教師にとって手応えのある瞬間だった。

2 今後の展望

今後は、他の運動領域でも「考えて動く」子どもたちの姿を目指す授業づくりをしていきたいと考えている。その授業づくりにおいて教師が大切にしていきたいことが、本研究を通して見えてきた。以下の二点である。

<p>①教師の意図的な手立てを講じること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主運動の動きが自然と身に付く準備運動をつくる。 ・試合などの主運動の時間が多い道すじの工夫をする。 ・動きのポイントが捉えやすい合言葉や口伴奏を考える。 ・一人一人に合った教師の言葉かけや、学習カードのコメントを記す。 ・映像機器を活用して、自分の動きを見つめさせる。 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>各運動領域によって講じる手立ては変わるが、安心感や意欲につながるような手立てであることが大切である。</p>	<p>②動き方や動きのポイントを理解させること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師が直接伝える。 ・教師の投げかけから気付かせる。 ・動いている最中に理解させる。 ・友達などから得た情報をもとに理解させる。 ・映像や写真などから理解させる。 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>動き方や動きのポイントを理解する過程は様々であるが、理解したことを教師がしっかりと全体でおさえていくことが大切である。</p>
---	--

①に示したように、子どもたちが「考えて動く」ために講じる教師の意図的な手立ては、それぞれの運動領域の特性や、発達の段階によって変わってくる。子どもたちがその運動に対して安心感や意欲をもつことができるような手立てを講じることが大切である。

また、②に示したように、子どもたちが「考えて動く」ためには、それぞれの運動の動き方や動きのポイントを理解する必要がある。この理解する過程は、教師が伝えたり、教師の投げかけから気付いたり、子どもたちが動いて理解したりと様々である。その一つ一つを教師はしっかりおさえて、子どもたち全体に広めていくことが大切である。

平成27年8月に中央教育審議会教育課程企画特別部会から「論点整理」が出された。その中で、各教科で「何を学ぶか」という必要な指導内容等を検討し、その指導内容を「どのように学ぶか」という子どもたちの具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要があると記されている。

これからの体育学習も、「どのように学ぶか（どのように技能を身に付けるか）」といった視点で考えていく必要がある。本研究では、この「どのように学ぶか」という子どもの学びの姿を「考えて動く」と捉え研究を進めてきた。

生涯にわたって運動に親しむ子を育てていくために、これからも私たち教師がしっかりと目の前の子どもたちの実態や発達の段階を見つめ、何を指導するのか、どのように技能を身に付けるのかを明確にしていくことが大切である。そして、子どもたちができるようになりたい自分の課題をもち、「考えて動く」ことで「できる喜び」につながるように、これからも教師の意図的な手立てを考えたり、一人一人に合った支援をしたりしていきたい。

「今日の体育楽しかった！またやりたい！！」という子どもたちの思いあふれる授業を目指して。

最後に、研究を進めるに当たりご指導・ご助言くださいました講師の先生方、また、快く授業校として協力してくださいました校長先生をはじめ学校教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 高橋健夫他『体育の授業を観察評価する』 明和出版 2003年
高橋健夫他『新版体育科教育学入門』 大修館書店 2010年
渡邊 彰他『小学校学習新学習指導要領 ポイントと授業づくり』 東洋館出版社 2010年
白旗和也 『学校にはなぜ体育の時間があるのか』 文溪堂 2013年
- 高橋健夫 「これからの体育授業研究に求められること」
体育科教育第59巻 第5号 大修館書店 2011年
白旗和也 「現行学習指導要領とアクティブラーニング」
体育科教育第63巻 第7号 大修館書店 2015年
- プロ野球機構
白旗和也他監修「みんなが輝くやさしいベースボール型授業」指導用教材 2015年

【指導助言者】

- 日本体育大学 体育学部 教授 白旗 和也
川崎市立小学校体育研究会長（川崎市立西梶ヶ谷小学校長） 佐藤 勝
川崎市立中学校教育研究会保健体育科部会長（川崎市立稲田中学校長） 大内 孝二
川崎市総合教育センター指導主事 中野 正明

【検証授業 協力者】

- 川崎市立大島小学校教諭 佐藤 貴博
川崎市立大島小学校教諭 小竹 里沙